



# クラフトワークの組織論研究と日本：竹内好を援用して

後藤，将史

---

**(Citation)**

国民経済雑誌, 223(6):105-119

**(Issue Date)**

2021-06-10

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/E0042480>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042480>



# 国民経済雑誌

クラフトワークの組織論研究と日本  
—竹内好を援用して

後 藤 将 史

国民経済雑誌 第223巻 第6号 抜刷

2021年6月

神戸大学経済経営学会

# クラフトワークの組織論研究と日本 — 竹内好を援用して

後 藤 将 史<sup>a</sup>

近年、クラフトワークに関する組織論研究が進んでいる。クラフトワークは、西洋的近代原理（近代組織・グローバル化・規模と利益の追求）への反作用として、欧州と米国を中心に関心を集めている。日本の伝統産業も、その好例として検討されている。そこでは、いちど内発的に「脱魔術化」（近代化）された世界が「再魔術化」（非近代性の積極的な再構築）する一現象として、クラフトが議論される。一方で非西洋世界では、近代化とは内発的な覚醒ではなく、外発的に押し付けられた急変化であった。そこでは、そもそも自らに根付いて消えない非近代性と、近代化の要求とをいかに併存させるかの問いと模索が続いてきた。そのような非西洋の思想には、「近代」に対するどのような視点が含まれていたのだろうか。本稿では、西洋と異なる日本にとっての「近代」を問い続けた重要な論者である竹内好の言説から、日本にとってのクラフトワーク研究の意味を考察する。

キーワード クラフトワーク、近代化、伝統産業、竹内好

## 1 はじめに

近年、クラフトワークに関する組織論研究が勃興している（Bell, Mangia, Taylor and Toraldo, 2019）。クラフトワークは、近代組織化・グローバル化・規模と利益の追求などの西洋的な近代原理が世界を支配した先に登場した反作用として、欧州と米国を中心に関心を集めている。クラフトワーク研究においては、日本の伝統産業もそうしたムーブメントの範疇で位置付けられ、日本酒（Sasaki, Ravasi and Micelotta, 2019）や寿司（Holt and Yamauchi, 2019）をはじめとした事例研究が行われている。そこでは、いちど内発的に「脱魔術化」（近代化）された世界が「再魔術化」（非近代性の肯定的再構築）する一作用として、クラフトが議論される（Suddaby, Ganzin and Minkus, 2017）。一方で非西洋世界では、近代化とは自らの文化が生み出した覚醒ではなく、植民地化の危機と共に外発的に押し付けられた急変化であった。そこでは、自らに根付いて簡単には消えない非近代性と、近代化しなければ生

---

a 神戸大学経済経営研究所, mgoto@rieb.kobe-u.ac.jp

き残れない世界とをいかに調和させ、生存圏を確保するかの模索が続いてきた。そのような非西洋の思想は、欧州米国が理論的に主導するクラフトワーク研究において、直接かえりみられるものではない。しかし、近代のあり方を再考し、非近代的な価値を再評価する上で、非近代性に根差しながら近代化と葛藤してきた非西洋の経験は貴重である。では、非西洋における「近代」に対する思想には、どのような視点が含まれていたのだろうか。本稿では、西洋とは異なる日本にとっての「近代」の意味を問い続けた重要な論者である竹内好の言説を援用し、日本にとってのクラフトワークの意義を考察する。

竹内好(1910-1977)は、魯迅の翻訳と批評をはじめとする業績を持つ、中国文学研究者として知られる。一方で、竹内にとって中国文学はあくまで重要な素材の一つであり、その素材を通じて、竹内は生涯を通じて一貫して西洋に端を発する近代化と非西洋、特に日本のあり方を問題に批判的探求を続けた(近代に関する著名な著作として竹内, 1959; 文学を通じた近代論として竹内, 2006e; 近代化に関する竹内の著作の概観の例として松本, 2005など)。その後、西洋による支配の退潮(問題の起点自体の変質と希薄化)、中国の経済大国化(持たざる圧迫される側であった非西洋の代表としての中国の変質)、世界の多極化の進展などの時代に伴う変化により、その論は具体的な国や人物に対する今日的な説明としての側面では、妥当性を減じている。しかし、今世紀に入り竹内好の言説はあらためて内外より注目を集めている(孫, 2005; 鶴見・加々美, 2007)。特に、竹内が投げかけた近代化に関する問いが新しい時代に持つ意味を中核的な関心として、新旧の論者を交えて彼に関する論考の出版が続いている(複数の論文に加え、黒川・山田, 2018; 子安, 2008; 鶴見, 2010; 中村, 2019; 松本, 2000, 2005など)。

本稿では、以下の順番に議論を進める。第一に、近年の欧州米国におけるクラフトワークの組織論研究の主要論点を概説する。特に、同研究が持つ近代化(その延長にある近代企業組織の浸透とグローバル経済化、大量生産消費主義)に対する反作用としての言説を強調する。第二に、竹内好の言説を援用して、非西洋である日本にとって近代化が西洋とは異なる視点で検討される中で、何が問題となってきたのかを概観する。第三に、両者の交点の示唆検討を通じて、日本にとってクラフトワーク研究がどのような意味を持つかを考察する。

## 2 クラフトワークの組織論研究

クラフトワークとは一般に、優れた技術や伝統を重要な中心価値として、手工業製品や職人によるサービスを提供する経済活動を指す。その主体は多くの場合、個性や創造性を重視する小規模企業である(Bell et al., 2019)。例えば、クラフトビール(Kroezen and Heugens, 2019)、絹織物(Toraldo, Mangia and Consiglio, 2019)、靴(Ott, 2019)、時計(Raffaelli, 2019)、香水(Endrissat and Noppeney, 2019)など幅広い分野で、活発に活動するクラフトワーク

企業の事例が報告されている。近年では情報技術の進化に伴い、個々の企業による取り組みを超え、Etzyのように零細なクラフト事業者と買い手を効果的に結びつけるプラットフォーム企業も登場し成長してきた (<http://www.etzy.com>)。

クラフトワークに一律の定義はなく、その範囲には多様な解釈があるが (Bell and Davison, 2013), 「クラフト」の共通項については一定の共通理解があるとされる。すなわち、前提として次のような世界の状況が、クラフトの観点では問題とされる。合理的な大量生産により、経済的だが没个性的な商品・サービスを量産し、規模と利益の最大化を目指す企業組織。そのような商品・サービスに席卷された市場。そしてその大量消費にまい進する消費文化。これに対して、クラフトはそれらとは大きく異なるいくつかの志向を持つ。クラフトワークの提供物は、実用性に加えてクラフトであること自体が情緒的価値をもち、作り手も買い手もそれが人間の手による創造的な仕事であることに特別な愛着を持つ (Becker, 1978; Rowley, 1997)。クラフト企業は必ずしも規模の拡大を優先せず、むしろその製品・サービスが意義あるやり方で持続的に提供され、その文化が継承されることを優先事項とする。クラフトワークは、効率重視で画一的な経済活動が世界を覆い尽くす中で、より意義のある代替的な働き方や生産方式・消費のあり方の可能性を提示し得る。クラフトムーブメントは世界中で広がりを見せており、通常の組織とは異なる原理を持つ組織化現象として、新しい理論的可能性が組織論研究において注目を集め始めている。クラフトワークの組織論研究ははまだ発展中の段階にあるが、次のような視点が強調されている。

第一に、クラフトワークの企業組織は、経済性と希少性のバランスを実現する必要がある。現代的な大規模生産システムと異なり、あえて人間の手作業に頼ることが多いその性質から、クラフトの製品・サービスは、その生産計画や質を正確にあらかじめ定めることが難しい不確実性を持つ (Bell et al., 2019)。そしてむしろ、その不完全であることこそが希少性を高める (Ulrich 2004)。しかし極端に少量かつ不安定な生産は、企業としての経済持続性を損ねる。したがって、クラフトワーク組織は、存続のためにどこまで・どのように経済性を追求すべきか (放棄すべきか)、慎重にバランスを取る必要がある。(Becker, 1978)。

第二に、クラフトワーク企業組織の多くは、伝統的価値を毀損しない形でイノベーションを実現していく必要がある (Sasaki et al., 2019)。クラフトワーク企業の多くは伝統産業と関連しており、伝統が本来の形で体現されていること自体が、その情緒的価値と深く関係している。伝統的な製法を守り、伝統的な素材を使い、伝統的な職人の技術で提供する製品は、大量生産品とは異なる「本物」としての情緒を生む。しかし、時に伝統の技の伝承は絶え、また一方で新しい技術が登場し、社会環境も変化する。たとえば、日本酒産業は、かつて季節労働の職能集団 (杜氏) が在来米を使い伝統技術で生産する完全な手工業であったが、現在では小規模のクラフト的な蔵元であっても、明治以降に開発された酒造技術・素材 (酒

米・麴)で生産性を担保し、工程に少なくとも一部は機械を導入し、また出稼ぎの消滅で減少した杜氏集団に依存しない、新しい組織形態に多くが移行している(藤本・河口, 2010)。これと関連して、クラフトワーク企業は、「クラフト」的な価値の訴求がブームに乗じて売らんがための単なるマーケティング手法であると誤解されないよう、いかに自らが「本物」であるかを注意深く訴求していく必要がある(Suddaby et al., 2017)。

そして第三に、この分野の研究が関心を集める一つの重要な理由として、クラフトワークが西洋的近代を再考する揺り戻しとしての側面を持つことが強調される(Weber, Heinze and De Soucey, 2008)。西洋的近代は、家族経営的な事業を近代官僚制組織に変え、企業成長と利潤の極大化志向を明確かつ当然の前提として企業組織に内部化し、またそれら自体が資本主義の普遍的真理として国境を越えて浸透する形で、経済面において世界展開した。このような変化は、働き手を脱属人化された取り替えのきく抽象的な存在に変え、消費者をグローバルで画一化された大量消費を追い求め続ける存在に変えた。これに対して、クラフトワークはこれらの原理とは異なる、近代以前に存在した、より意義にあふれた社会の一側面を回顧する動きと捉えられる。クラフトワークは、働き手としての観点では、無機質で機械的な組織人から人間本来の、自らの手で意義を感じられ唯一無二で創造性のある仕事をし、それを身の丈での豊かさとして生きていく、そのような価値観を取り戻すものとされる(Bell et al., 2018)。これは、技術進歩により人間の仕事が代替され、労働者はスキルを失い無能化し、資本家の搾取が強まるとするマルクス主義的な世界観(Braverman, 1974 など)に対するアンチテーゼともなる。また消費の観点から、クラフトワーク的な生産形態や消費志向が拡大することは、地産地消や供給者の健全な相互扶助エコシステム、より環境負荷が小さく持続可能性の高い生活スタイルとも親和性があり、クラフトにはサステナビリティの視点で未来的な価値が提唱される側面もある(e.g. 太田, 2019)。これらを総括して、Suddabyら(2017)は、クラフトワークとは近代化が進行した社会において、人々がコミュニティとしての社会と本物らしさの感覚を取り戻す揺り戻しの一環であると主張する。そこでは何より、「脱魔術化」—近代以前に世界を支配していた魔術的な迷妄が除去され、科学と経済合理性が隅々まで行き渡った進歩(Weber, 1993)—したはずの経済生活への信頼が揺らぎ、過去への回顧的な郷愁とともに世界が「再魔術化」に向かい得ることが含意される。そしてそれは日本に関する研究においても例外ではなく、クラフトは既に近代化した社会において、郷愁と共に過去(非近代性)のある側面が再構築される現象として位置づけられる(Holt and Yamauchi, 2019)。

### 3 近代化における日本の問題—竹内好の視点

これに対して、非西洋世界では、近代化に関してここに取り上げられていない複雑な葛藤

が積み重ねられてきた。ここでは、クラフトワーク論が提起する近代の再考としての側面に関連して、非西洋である日本において近代がどのような問題であったか、代表的思想家の一人である竹内好がどのような問題を提起していたかを整理する。竹内の論考はその主張が多岐にわたり、また戦前から戦後にかけて、また安保闘争の前後においてなど、時代によって変遷を遂げてきた（松本，2005）。一方で、近代の意味とそれが照らし出す日本の姿は一貫したテーマでもあった。彼の主要な論考を通じて、近代化と日本に関して提起された主題は、大きく次の4つの視点に整理することが出来る。

### 3.1 すべてを包括する統一的な世界把握としての西洋近代

第一に、前提として、西洋に端を発する近代化は世界を席卷する後戻りの無い運動であり、不可避のものであるとする認識がある。これは、一つには近代の起源である西洋において「近代＝普遍」とする世界観が内在化していたことを指す。そしてもう一つには、非西洋である日本が、近代化を自らが直面した逃れようのない一本道として認識したことも指す。竹内は、それを「文明一元観」として論じている。

「文明一元観というのは、歴史は未開から文明への一方交通だという歴史観を軸にして世界を解釈する思想のことである。文明とは、ある本源的な力であり、定冠詞つきで呼ばれるべきものである。その文明が野蛮へ向って滲透する自己運動の軌跡が歴史である。文明の内容は、論者によって、また時期によって一様でないが、それが物質であるにせよ精神であるにせよ、ともかく野蛮への光被によって自己貫徹せざるをえない根本のある何者かである。万物を生育する太陽のようなものである。文明こそすべてである。こうした思想が、日本の近代化の起動力になっていたと考えられる<sup>1)</sup>」

子安（2008，pp. 167-168）は、ここで文明として竹内が意味した合理主義を、「分析的、認識的理性によってすべてを対象化しようとする認識衝動と、ロゴス化された知識として対象を己の側に収納してしまう征服衝動を内包した知的運動」としている。このような西洋的な近代合理主義は、西洋においては自らの歴史的経験と背景から内発的に生まれてきた自然の産物であり、それ自体が自らの社会における伝統と文化の中核をなすものであって、その受容が深刻な問題となることは少ない。一方で、西洋とは別個の歴史と伝統を持つ非西洋では、近代化の必要性に迫られる中で、自らが根ざしてきた民族的な社会前提と西洋の近代との差異が浮き彫りになる。こうした違いが明白になることは、受け手である非西洋を一方的に変えるのではなく、「近代」自体を別のものに変質させるエネルギーを生む可能性がある。しかし、既述のような性質の合理主義のもとでは、どのような非西洋的な異見も合理的な対処が

可能であり、西洋が持つ「すべてのものを究極的には対象化して取り出しうるという徹底した合理主義の信念を動かすことはできなかった」。そのため、近代化とは、少なくとも理念型では例外の無い一本道の合理主義の受容であり、竹内の言説を引用すれば、「近代主義とは、いいかえれば、民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する、ということ<sup>2)</sup>」になる。

### 3.2 非西洋における近代に対する抵抗の普遍性

第二に、このような近代化の波に対して、竹内は抵抗こそが非西洋における重要な現象であると提起する。合理主義は、すべてを包括する普遍原理として、非西洋に対しても強い受容圧力をもたらす。民族的な独自性にこだわるよりも、まず近代を受け入れ、そのモデルを教科書として模倣することで、政治的にも経済的にも強固な基盤を作ることが出来る。だからこそ、近代受容による自らの近代化を無上の優先事項とし、近代化の進展度に応じて国家や民族の優劣を判断する価値観が形成される。竹内は、それを「近代主義」と規定し、そのような盲目的な近代化の受容ではなく、近代主義の克服こそが真に近代が非西洋に突きつける課題であると論じた。たとえば、竹内は次のように説く。

「近代主義は、前近代的社会、つまり身分制が解放されていない社会に、近代が外から持ち込まれた場合に発生する意識現象である。その実例は、ロシアや中国にたくさんある。日本ほど骨がらみになってはいないにしても（それは日本の歴史事情に由来する）、ともかく日本だけの特殊現象ではない。だから、その克服によって近代化が実現されるという法則は、日本でも当てはまるはずだ。」<sup>3)</sup>

近代主義の克服を視野に入れることは、近代の単純な受容に対する抵抗につながる。抵抗は非西洋に広くみられる現象であり、またそのような抵抗運動を通じて自らを問い直してこそ、自らを理性において把握する（近代的な意味での）自己認識が非西洋にはじめて生まれたとも言える。竹内はこの点を次のように述べる。

「ヨーロッパがどう受け取ったにせよ、東洋における抵抗は持続していた。抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。抵抗の歴史は近代化の歴史であり、抵抗をへない近代化の道はなかった。」<sup>4)</sup>

竹内はこのような近代に対する抵抗現象の主体を、地理的な概念に囚われず「アジア」と規定し、「アジア」という概念を西洋すなわち近代に対する対立概念として導出した。一方で、非西洋（「アジア」）における抵抗は、西洋にとっても近代の意味を明確化する反作用であっ

た。すなわち、西洋は近代を非西洋に浸透させ、その抵抗という反作用を受けることを通じて、近代が持つ普遍性と優位性を確認し実証していった。また非西洋にとって、抵抗は西洋的近代に代わる代替的なモデルの実体確立の成否という意味では、歴史上で成功してきたとは言いがたく、近代化の過程は非西洋にとって抵抗を伴う葛藤と漸進的な近代受容の継続でもあった。竹内は、次のようにこの両者の関係性を記述している。

「ヨーロッパは、東洋の抵抗を通じて、東洋を世界史に包括する過程において、自己の勝利を認めた。それは文化、あるいは民族、あるいは生産力の優位と観念された。東洋はおなじ過程において、自己の敗北を認めた。敗北は抵抗の結果である。抵抗によらない敗北はない。したがって、抵抗の持続は敗北感の持続である。ヨーロッパは一步ずつ前進し、東洋は一步ずつ後退した。後退は、抵抗を伴う後退であった。この前進と後退が、ヨーロッパにとって、世界史の進歩と観念され、理性の勝利と観念されるということ、そのことが、持続する敗北感のなかで、抵抗を通じて東洋に作用したとき、敗北は決定的になった。つまり、敗北は敗北感において自覚された。<sup>4)</sup>」

### 3.3 抵抗の型に応じた、複数の近代化の道筋の可能性

第三に、竹内は、特に非西洋において、近代化の道筋には複数の可能性が本来的に存在することを提唱している（但し、西洋的近代を凌駕し代わるものが実体として登場したとは確言していない）。たとえば、『方法としてのアジア』において、竹内はそれを次のように端的に述べている。

「後進国における近代化の過程に二つ以上の型があるのではないか。……日本の近代化は一つの型ではあるけれども、これだけが東洋諸国の、あるいは後進国の近代化の唯一絶対の道じゃなくて、ほかに多様な可能性があり、道があるのではないか、と考えたのです。<sup>5)</sup>」

複数の近代化の道筋の可能性の中で、特に竹内が深く論考を重ねたのが、日本の近代化と（理念型としての）中国の近代化との比較という視点である。

「私がいまここで問題にしていることは、一般化していえば、近代化の方式における日本の型と中国―ひろくはアジア全体―の型のちがいにすることに帰着する。精神や文化の領域で言えることが、生活全体についても当てはまると私は思うのである。<sup>6)</sup>」

その比較の中で、竹内は重要な指摘をする。それは、近代化の道筋を定める決定要因として、近代化に対する抵抗のあり方が重要な役割を果たすとする視点である。特に中国の場合、20世紀前半までの状況を考慮すれば、当時前近代性を克服することができないがために、政治経済の近代化が停滞することで国家が弱体化し、その混乱により近代化が遠のき続けたとする見方がある。しかし竹内によれば、実際には中国では強い抵抗が続くことで外見上は近代化が遠のきながら、かえって自らが自らのための「近代」（前近代に代わるものであるが、必ずしも西洋的近代を意味しない）を創発するという、内発的な真の意味での近代化に近い変化が進行していったとされる<sup>7)</sup>。

「近代化の過程において、先進国から圧迫を受ける、それをはね返す過程が自分自身の近代化になるわけですが、その過程で少くとも、二つの違った型が出ていると思うのです。一つは日本やトルコのやり方、もう一つは、中国とか、インドとか、日本以外の、多くのアジア諸国が別の一つの型を持っている。

AとBに分けると、日本がA型とすると、中国はB型になります。その特徴は、中国についていうと、非常に抵抗が大きかったというか、西洋文化の移入を容易ならしめる要素が少なかったということです。日本のように、うまく転換できなかったのです。自然、内発的な近代化の方向が出てきた。簡単に言うところのことになるわけです。」<sup>8)</sup>

このような視点から、竹内は複数の近代化の道筋の可能性の中で、中国のモデルに一定の評価を与えている（竹内、2006d）。たとえば『胡適とデューイ』において、1920年前後に中国に滞在したアメリカ人哲学者ジョン・デューイが当時の混沌とした中国に対して示したその内在的変化への評価にも言及し、竹内は次のように述べている。

「中国に近代を強制したのはヨーロッパであるが、その強制を、はねかえすことによって、中国は、逆に近代を自分のものとして発足した。ここに、日本と中国との近代化の方向の決定的な差があり、同時に、日本人が中国を理解しえなかった原因がある。」<sup>9)</sup>

### 3.4 日本における近代化の特質としての抵抗の欠如と優等主義

そして竹内は第四に、日本型の近代化が持つ特異性として、二点を指摘する。第一に、近代への抵抗が欠落した状態で、西洋的近代を不可思議なまでに勤勉に導入してきたこと。第二に、その背後要因となっている、模範への忠実な追従を絶対視する優等主義である。

第一の点において、竹内は近代化の道筋を比較した結果、日本が急速に物質的な近代化を実現したのは、西洋的近代に対する抵抗がなかったことを意味すると喝破する。明治維新以

後、日本は西洋が体現する近代の原理を積極的に導入し、そのひな形を周辺諸国よりも早く再現し活用することが、国家的な方針として不可避の前提と認識された。竹内はこれを、次のように述べている。

「日本は、近代への転回点において、ヨーロッパに対して決定的な劣勢意識をもった（それは日本文化の優秀さがそうさせたのだ。）それから猛然としてヨーロッパを追いかけはじめた。自分がヨーロッパになること、よりよくヨーロッパになることが脱却の道であると観念された。つまり自分がドレイの主人になることでドレイから脱却しようとした。<sup>10)</sup>」

そのような急速な転身を可能とするのは、自らのあるべき姿やそれを支える原理を、自らの力で主体的に構築する努力を放棄し、既に確立して主流となると認識されたモデルに飛び付く姿勢である。竹内の次の主張が示すように、これは日本人の総体としての主体的な思考の欠如と紐付けられる。

「こうした主体性の欠如は、自己が自己自身でないことからきている。自己が自己自身でないのは、自己自身であることを放棄したからだ。つまり抵抗を放棄したからだ。出発点で放棄している。放棄したことは、日本文化の優秀さのあらわれである。……抵抗を放棄した優秀さ、進歩性のゆえに、抵抗を放棄しなかった他の東洋諸国が、後退的に見える。<sup>11)</sup>」

竹内は、このような主体性の欠如の問題を軸に、複数の著作を通じて日本の近代化のあり方を鋭く批判している。さらに次のように、竹内はこのような傾向は、単なる明治維新以後の一時の現象に限らず、時代を通じて日本に根付いた課題ではないかと指摘する。

「日本文化は、伝統のなかに独立の体験をもたないのではないか、そのために独立という状態が実感として感じられないのではないか、と私は思う。外からくるものを苦痛として、抵抗において受け取ったことは一度もないのではないか。自由の味を知らぬものは、自由であるという暗示だけで満足する。ドレイは自分がドレイでないと思うことでドレイである。「呼び醒まされた」苦痛は、日本文化には無縁ではないのか。<sup>12)</sup>」

ここでは、物質的な近代化は成し遂げたとしても、日本人は真の意味での近代化（西洋的な結論と全く同じとは限らない、世界に対する自らが創発した意味づけと主体的な原理の確

立)には、いまだ至っていないことが含意される。このような主体性の放棄が続く限り、近代化はどこまでいっても形式的な模倣の域を出ず、また新たな「近代」モデルが登場すればそれを輸入しコピーして済ませることで、奥底にある前近代性は保存されていくのである。

そして、この要因でもある日本型近代化の第二の特性として、竹内は「優等生主義」と呼ぶ根強い志向性の存在を主張する。優等生主義について、竹内は次のように説明する。

「学問なり文学なり、要するに人間の精神の産物である文化が、追いかけてつかまえるべきものとして、外にあるものとして、かれらには観念されている。それをつかまえる努力において、かれらはじつに熱心である。追いつけ、追いこせ、それは日本文化の代表選手たちの標語だ。人に負けてはならぬ。一步でも先へ出る。かれらは、優等生のよう<sup>13)</sup>に、点数をかせぐ。事実また、学校時代の優等生が日本文化の代表選手になり、優等生制度と優等生精神で次代を教育した。だから日本文化は、構造的に優等生文化である。」

近代化の文脈では、優等生主義は文明一元観を抵抗なく受け入れ、近代主義を追ってそれに従う勤勉な努力を積み重ねることに貢献してきた。それは、教科書が与えられ、その理解度と再現性を一つの尺度で評価され成績を競い優等生を目指す環境と、大きく付合していた。しかし、ここでいう優等生にとって、教科書は与えられるものであり、教科書となる原理を自ら創造することはない。また教科書の妥当性を批判的に検討することよりも、新しい教科書が確立されれば素早くそれに乗り換えることが重視される。これを竹内は、「ドレイの勤勉」とも呼んでいる。

「ヨーロッパでは、観念が現実と不調和(矛盾)になると(それはかならず矛盾する)、それを超えていこうとする方向で、つまり場の発展によって、調和を求める動きがおこる。そこで観念そのものが発展する。日本では、観念が現実と不調和となると(それは運動ではないから矛盾でない)、以前の原理を捨てて別の原理をさがすことからやりなおす。観念は置き去りにされ、原理は捨てられる。……自由主義がダメなら全体主義、全体主義がダメなら共産主義、ということになる。……それはたえず失敗はするが、失敗を失敗することは絶対にない。失敗は成功の母、失敗したらやりなおせばいい。……日本イデオロギイには失敗がない。それは永久に失敗することで、永久に成功している。無限のくりかえしである。……まったく、それは勤勉というよりほかにいいようがないだろう。ただ、その進歩がドレイの進歩であり、勤勉がドレイの勤勉であるだけだ。」<sup>14)</sup>

ここで重要な点は、次の引用に示されるように、教科書となるモデルが継続的に与えられ続けることを想定した、受動性が前提となっていることである。竹内はこのようにモデルを次々乗り換えて済ませる志向を「転向文化」と呼び、特に戦前戦後を通じても変わらないこの受動性が、転向文化および日本の近代性のいびつさと深く結びついていることを主張した。

「新しいものが古くなったら、別の新しいものと交換しなければならぬ、それが学問に忠実な所以だ、と考える。……この「なければならぬ」はというのは、新しいものを「求める」方向での「なければならぬ」だ。「求める」のは、与えられる予想があるからだ。そして与えられる予想は、かつて与えられた、いまでも与えられている、将来も与えられるだろうという、与えられる環境のなかで形成されてきた心理傾向がもとになっている。つまり構造的にそうだ。だから与えられることは自明で、与えられぬ状態を考<sup>15)</sup>えることはできない。」

#### 4 近代論としてのクラフトワークと日本にとっての意味

ここまで、クラフトワークの組織論研究における主要論点を概観し、またそこで重要な問題とされる近代の再考について、非西洋（日本）の視点で近代を批判的に考察した竹内好の言説における、近代化と日本の問題を整理した。これらの相異なる視点を交差すると、いくつかの示唆が浮かび上がる。

第一に、竹内の言説は、近代化が既に当然達成された所与の現象であったという、クラフトワーク論の重要な出発点の前提に疑義を呈する。前近代性を保存したまま形式的な近代化を実現した日本というとらえ方が可能だとすれば、世界がいちど「脱魔術化」されたというテーゼは、西洋には適合しても、非西洋には実は必ずしも適合しないとも考えられる。すなわち、本質的には世界はそもそも西洋と同じ意味で「脱魔術化」などされてこなかった。非西洋にはいまだ魔術の中に生きる側面が維持され、従って西洋と同じ意味で「再魔術化」される余地は限定的である。このような見方に立てば、クラフトワークをめぐる組織論は、西洋にとっては注目すべき新現象であっても、非西洋にとってはむしろ当然の古典的現実をなぞることを意味するかも知れない。

第二に、竹内の言説は、西洋近代に対する抵抗の普遍性を指摘することを通じて、クラフトワーク論が提起する近代の再考運動が新奇な現象などではなく、むしろ近代化に内在して問われ続けてきた課題ときわめて親和性が高いことを示唆する。近代化は反作用あってこそ近代化であり、竹内の言葉を借りれば、世界への近代化の拡散の時代を通じて常に、「ヨーロッパは不断の緊張においてでしかヨーロッパでない<sup>16)</sup>」のである。その意味でクラフトワーク論は、自らの生み出した近代が表裏一体でもたらし続けていた反作用の蓋然性に、西洋の

経営学が遅ればせながらようやく意識を向け始めた萌芽とみることもできよう。

第三に、竹内の言説は近代化における複数の道筋（およびその帰結として近代のあり方そのものの多様性）を含意するが、これは近代の再考としてのクラフトワークが、企業組織のあり方の多様性に結びつくことと二つの意味で連動する。第一に、クラフトワーク企業が一般の企業組織と異なる組織原理を持つとすれば、そのような企業が増加すること自体が、企業のあり方を多様化する。そして第二に、同じクラフトワーク企業の中でも、西洋的なそれと非西洋的なそれとの間で、多様性が存在する可能性がある。なぜならば、近代化された存在が前近代的な価値を郷愁と共に再構築することと、そもそも完全に近代化されていない存在が過去から続く組織を生存のため環境に合わせ発展させることとは、その意図や制約条件が大きく異なるからである。たとえば、近年に創業したクラフトビールの作り手と、創業から数百年続く酒造家とでは、組織化の原理がさまざまな点で異なり得ることは容易に想像できる。

これらの示唆を踏まえて、あえて飛躍を恐れず議論を進めるなら、クラフトワークの組織論研究は、日本にとって次のような意味を持つと考えられる。第一に、独特の近代化過程をへて、またクラフトワークに親和性の高い多くの伝統産業企業が残る日本にとって、クラフトワーク研究は研究発信の絶好の機会となり得る。すでに事例研究が複数登場しているように（e.g. Holt and Yamauchi, 2019; Sasaki et al., 2019）、日本は、豊かな文化的文脈を持ち近代組織とは異なる組織化性向を持つ組織事例に事欠かない。さらに日本には、クラフトワークの代表例である伝統的手工業に関する国内経営学研究の大きな蓄積がある（cf. 太田, 2019）。米国欧州を中心としたクラフトワークの組織理論化の動きに対応し、そこに参加することで経営学界における日本の発信力を高めていくことには、一定の価値があるだろう。

第二に、クラフトワーク研究の発信余地を考えることは、国内研究の現状を浮かび上がらせることに資する。クラフトワーク研究に発信機会があるとしても、西洋経営学の理論を借用してそれを国内事例に適用し説明を行うのみでは、クラフトワークという新しい理論の問題集を提供され、それを優等生的に埋めていくことと大きく変わらない。ただ単に、クラフトワーク研究ブームが来たから、テンプレートとなる理論を借用して論文出版を狙うだけであれば、それは「ドレイの勤勉」に他ならないだろう。竹内好は、優等生主義から脱却し、自らの思考と責任で世界をとらえることの重要性について、次のような言葉を残している。

「今までは、人の言うことを聞いて、人の借り物で済ませたけれども、これからはそうじゃいけない。……今や起死回生のときだ、そういう道を自分で考えなければいけない。それには、まず、現状を正しくとらえるということが大事だろうと思います。」<sup>17)</sup>

この点に関連して、国内経営学での伝統産業の事例研究においては、個別事例について詳細な描写と優れた洞察が多く含まれるものの、クラフトワーク論の視点も包含した体系的な理論構築を推進する余地は大きく、またそれが大きな価値を生む可能性は高いのではないだろうか。

そして第三に、クラフトワークは近代の再考が紐付いた議論であるからこそ、近代化に関して特異な立場にある日本からの、近代論も含めた積極的な理論的貢献が有用である。世界は一元的に近代化し終えたのではなく、良きにつけ悪しきにつけ、たとえば日本にはそもそも「脱魔術化」できなかった側面が色濃く残る。あるいは少なくとも、そのような可能性や解釈を巡る議論が、西洋とは離れた言語空間でこの100年以上を通じて活発に続いてきたことは事実である。クラフトワークの代表的企業群である伝統産業をとっても、外から来た急激な近代化と伝統とを葛藤の中で共存させてきた多くの企業があり、それは西洋的認識を補完する理論的貢献のための豊かな土壌である。竹内好は、『方法としてのアジア』において、非西洋的視点による西洋的認識の補完と共進化を次のように提言している。組織論や経営学と現代思想とは分野が異なり分断された世界だが、クラフトワーク研究のように近代自体を問う問題意識が介在するとき、思考は分野の垣根を越えて共振する。

「西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために西洋をもう一度東洋によって包みかえす、逆に西洋自身をこちらから変革する、文化的な巻き返し、あるいは価値の上の巻き返しで、東洋の力が西洋の生み出した普遍的な価値をより高めるために西洋を変革する、これが今の東対西という問題点になっている。……その巻き返す時に、自分の中に独自のものがなければならない。それは何かというと、おそらくそういうものが<sup>18)</sup>実体としてあるとは思わない。しかし方法としてはありうるのではないか」

#### 注

- 1) 竹内好 (1961a), pp. 353-354.
- 2) 竹内好 (2006b), p. 188.
- 3) 竹内好 (2006c), pp. 212-213.
- 4) 竹内好 (1966c), p. 14.
- 5) 竹内好 (1961b), p. 219.
- 6) 竹内好 (1966a), p. 121.
- 7) 中国にとって近代化とは何か、それがどのように進展したかについては、当事者である中国や歴史学の視点からはこれと異なる視点も当然存在するが (cf. 孫, 2005; 鶴見・加々美, 2007), ここでは竹内が示した理論的考察から、本論題に対する示唆を抽出することにとどめた。
- 8) 竹内好 (2006a), pp. 307-308.
- 9) 竹内好 (1966b), pp. 338-339.

- 10) 竹内好 (1966c), p. 37-38.
- 11) IBID, p. 38.
- 12) IBID, p. 47.
- 13) IBID, p. 29.
- 14) IBID, p. 27-28.
- 15) IBID, p. 28.
- 16) IBID, p. 15.
- 17) 竹内好 (2006a), p. 308.
- 18) 竹内好 (1961b), pp. 237-238.

#### 参 考 文 献

- Becker, H. S. (1978) "Arts and crafts." *American Journal of Sociology*, 83(4), 862-889.
- Bell, E. and Davison, J. (2013) "Visual management studies: empirical and theoretical approaches." *International Journal of Management Reviews*, 15(2), 167-184.
- Bell, M., Mangia, G., Taylor, S. and Toraldo, M. L. (2019) *The organization of craft work: Identities, meanings, and materiality*. London: Routledge.
- Braverman, H. (1974) *Labor and monopoly capital: The development of work in the twentieth century*. New York: Monthly Review Press.
- Endrissat, N and Nopeney, C. (2019) "Smells like craft spirit: Hope, optimism, and sellout in perfumery." E. Bell, G. Mangia, S. Taylor and M. L. Toraldo (eds), *The organization of craft work: Identities, meanings, and materiality*, London: Routledge, pp. 98-117.
- Holt, R. and Yamauchi, Y. (2019) "Craft, design and nostalgia in modern Japan: The case of Sushi." E. Bell, G. Mangia, S. Taylor and M. L. Toraldo (eds), *The organization of craft work: Identities, meanings, and materiality*, London: Routledge, pp. 20-40.
- Kroezen, J. J. and Heugens, P. P. (2019) "What is dead may never die: Institutional regeneration through logic reemergence in Dutch beer brewing." *Administrative Science Quarterly*, 64 (4), 976-1019.
- Ott, R. (2019) "The Cordwainer's lair: Contingency in bespoke shoemaking." E. Bell, G. Mangia, S. Taylor and M. L. Toraldo (eds), *The organization of craft work: Identities, meanings, and materiality*, London: Routledge, pp. 196-216.
- Raffaelli, R. (2019) "Technology reemergence: Creating new value for old technologies in Swiss mechanical watchmaking, 1970-2008." *Administrative Science Quarterly*, 64 (3), 576-618.
- Rowly, S. (1997) "Introduction." S. Rowly (ed.), *Craft and contemporary theory*, St. Leonards, AU: Allen & Unwin, pp. xiv-xxvi.
- Sasaki, I., Ravasi, D. and Micelotta, E. (2019) "Family firms as institutions: Cultural reproduction and status maintenance among multi-centenary shinise in Kyoto." *Organization Studies*, 40 (6), 793-831.
- Suddaby, R., Ganzin, M., and Minkus, A. (2017) "Craft, magic and the re-enchantment of the world." *European Management Journal*, 35 (3), 285-296.
- Toraldo, M. K., Mangia, G and Consiglio, S. (2019) "Crafting social memory for international recogni-

- tion: The role of place and tradition in an Italian silk-tie maker.” E. Bell, G. Mangia, S. Taylor and M. L. Toraldo (eds), *The organization of craft work: Identities, meanings, and materiality*, London: Routledge, pp. 118–133.
- Ulrich, P. (2004) “Workmanship: The hand and body as perceptual tools.” A. M. Fareilo and P. Owen (eds), *Objects and meanings: New perspective on art and craft*. Lanham, MD: Scarecrow Press, pp. 198–215.
- Weber, M. (1993) *The sociology of religion*. Boston: Beacon Press.
- Weber, K., Heinze, K. L. and De Soucey, M. (2008) “Forage for thought: Mobilizing codes in the movement for grass-fed meat and dairy products.” *Administrative Science Quarterly*, 53 (3), 529–567.
- 太田康博 (2019) 「起業家による持続可能なクラフトの創造」『経営研究』, (69), 33–52.
- 黒川みどり・山田智 (編著) (2018) 『竹内好とその時代 歴史学からの対話』有志舎.
- 子安宣邦 (2008) 『「近代の超克」とは何か』青土社.
- 孫歌 (2005) 『竹内好という問い』岩波書店.
- 竹内好 (1959) 「近代の超克」『近代日本思想史講座 近代化と伝統』筑摩書房.
- 竹内好 (1961a) 「日本とアジア」『近代日本思想史講座 世界の中の日本』筑摩書房.
- 竹内好 (1961b) 「方法としてのアジア」武田清子編著『思想史の方法と対象』創文社.
- 竹内好 (1966a) 「アジアにおける進歩と反動」『日本とアジア (竹内好評論集第三卷)』筑摩書房.
- 竹内好 (1966b) 「胡適とデューイ」『日本とアジア (竹内好評論集第三卷)』筑摩書房.
- 竹内好 (1966c) 「中国の近代と日本の近代」『日本とアジア (竹内好評論集第三卷)』筑摩書房.
- 竹内好 (2006a) 「基本的人権と近代思想」丸川哲史・鈴木将久編著『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし』日本経済評論社.
- 竹内好 (2006b) 「近代主義と民族の問題」丸川哲史・鈴木将久編著『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし』日本経済評論社.
- 竹内好 (2006c) 「国民文学の問題点」丸川哲史・鈴木将久編著『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし』日本経済評論社.
- 竹内好 (2006d) 「ナショナリズムと社会革命」丸川哲史・鈴木将久編著『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし』日本経済評論社.
- 竹内好 (2006e) 「文学における独立とは何か」丸川哲史・鈴木将久編著『竹内好セレクション I 日本への／からのまなざし』日本経済評論社.
- 鶴見俊輔 (2010) 『竹内好 ある方法の伝記』岩波書店.
- 鶴見俊輔・加々美光行 (編著) (2007) 『無根のナショナリズムを超えて 竹内好を再考する』日本評論社.
- 中村愿 (2019) 『戦後日本と竹内好』山川出版社.
- 藤本昌代・河口充勇 (2010) 『産業集積地の継続と革新 京都伏見酒造業への社会的接近』文眞堂.
- 松本健一 (2000) 『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波書店.
- 松本健一 (2005) 『竹内好論』岩波書店.